

「映画とテレビから考える 1964 年＝東京オリンピックの時代」

日時 2016 年 9 月 23 日（金）午後 6 時 30 分～午後 8 時

場所 立教大学池袋キャンパス 10 号館 X107 教室

<https://www.rikkyo.ac.jp/access/ikebukuro/direction/> 立教大アクセス

<https://www.rikkyo.ac.jp/access/ikebukuro/campusmap/> キャンパス内地図

報告者 日高勝之（立命館大学）

司会 笹田佳宏（日本民間放送連盟オリンピック担当）

企画意図

2016 年のリオ・デジャネイロ・オリンピックでは日本人選手の活躍が目立った。4 年後は東京が舞台となることで、1964 年の東京オリンピックへの回顧や総括がなされる機会が今後メディアを中心に増えるだろう。これまでも東京五輪、および五輪に関係する 1964 年を検証する研究は少なからずあり、とりわけ、2020 年の開催が決まってからは、アカデミックな関心も喚起されてきた。しかしながら、1964 年前後のメディア状況、当時のメディアによる時代イメージのありようなどは、これまで必ずしも十分に議論されてこなかった。放送研究部会では、「映画とテレビから考える 1964 年＝東京オリンピックの時代」をテーマに研究会を開催する。報告は日高勝之会員が行う。1964 年前後の時代は、1955 年～73 年頃の高度経済成長期の中央部に位置し、予想を上回る経済成長を達成しつつあった時期であると共に、メディア、とりわけ映画やテレビなどの映像メディアは、ハードとソフトの両面で現在のありようにつながる構造的な「原型」とでもいうべきものが複合的に芽生えた重要な時期だと日高会員は指摘する。また、同会員はこれまで 21 世紀に入ってから昭和が懐古・回顧される現象としての「昭和ノスタルジア」をめぐる研究を続けてきたが、いわゆる「昭和 30 年代ブーム」の最後の年を飾る 1964 年は、東京五輪という戦後最大級のイベントが開催されたモニュメンタルな年でありながらも、必ずしもメインターゲットにはなっておらず、近過去への回顧的なまなざしの観点からは、1964 年はノスタルジアの対象としてはむしろ回避されることもあると指摘する。

研究会では、1964 年という時代のメディア状況とその後への影響と共に、近年のメディアの 1964 年の位置づけとその背景について、主に映画とテレビを題材に日高会員より報告をしてもらう。その後、報告に基づき、参加者と共に、東京五輪が開催された 1964 年前後のメディア状況についての議論を進展させると共に、来たる 2020 年に向けてのメディアの課題も考えたい。